

日本建築の窓の魅力を短編映画で世界に発信 — 窓学研究により明かされた「掬月亭」の多彩な美 —

YKK AP 株式会社 窓研究所, 早稲田大学 中谷礼仁研究室

YKK AP 株式会社は、2007 年より、窓を学問として多角的に探究する研究活動「窓学」を主催しています。その一環として、2014 年、早稲田大学中谷礼仁研究室による「柱間装置の文化誌」研究が開始されました。本稿では、研究プロジェクト全体の基本構想を概括した後、その第一弾として、「掬月亭」に関する調査・研究の成果を紹介します。

1. 「窓学」の新展開： 日本建築の窓への着目と発信

窓学とは、窓の技術的側面にとどまらず、その歴史的・文化的価値をも問う、学際的な研究活動です。今回は、歴史上重要な日本建築の窓に着目しました。

中谷研究室は、歴史工学という新しい建築史のあり方を構築し、建物から村落・都市までスケール横断的に調査・研究する研究室です。本研究では、歴史工学というアプローチから、日本建築における窓の特徴を西洋建築の窓と比較しつつ明らかにするとともに、その魅力を短編映画という手法を用いて表現する新しい試みを行ないました。

2. 柱間装置の文化誌研究の概要

2.1 柱間装置とは

本研究では、日本建築ならではの美しい窓のあり方として、柱間装置に注目しました。

柱間装置とは、日本建築において、柱と柱の間に取り付けられる建築の部位すべてのことをさす文化財用語です。具体的には、襖・障子・唐戸・格子戸などの各種建具が挙げられます。さらには、床に敷かれた板や畳、そして壁や天井も、柱間装置の考え方で構成されています。日本建築は、その柱間装置の多様性によって、空間的豊かさを生み出してきました。

2.2 柱間装置から見る日本建築の特徴

柱間装置の多様性がなぜ生まれたのかを、西洋建築



多様な柱間装置によって構成される日本建築
(出典：映画『Transition of Kikugetsutei』、
中谷研究室撮影。以下、同様)

との比較から考察します。古代ローマ建築などの西洋の伝統的建造物は、石や煉瓦などの厚い壁によって構造が成立する組積造です。構造材としての厚い壁に穿たれた穴が窓となります。これに対して日本建築は、柱と梁によって構造が成立する軸組構造のため、柱・梁以外の部分は基本的には開口部とすることができます。極めて開放的な空間を閉じていくように、柱と柱の間に取り付けられる装置（すなわち柱間装置）が、日本建築の窓ということになります。厚い壁で閉じられた空間を、開口部としての窓によって開いていく西洋建築との考え方の違いが、ここに見受けられます。

柱・梁によって構造が成立する日本建築では、柱間装置は必ずしも固定する必要はありません。襖や障子などの可動建具によって、空間を自由に開いたり閉じたりすることが可能です。このような可動建具としての窓は、建築の内部空間に、劇的な変化をもたらします。開放すれば明るく風



窓の開閉による空間の変化

通しのよい空間になり、閉じれば光も風も遮る閉鎖的な空間になります。

空間の可変性こそが日本建築の一つの特徴であり、それをもたらすのが柱間装置としての窓です。空間の開放性や閉鎖性を、四季のうつり変わりや天候、昼と夜などの時間変化に応じて絶妙に調整していくために、柱間装置の多様性が生じたと考えられます。

2.3 柱間装置の文化誌研究とは

本研究は、バリエーション豊かな柱間装置の発展の歴史を、古代から現代まで通史的に探り、人類史として描いていく試みです。研究対象として、各時代の重要な建築物を、日本各地から複数選定します。

研究手法として、各調査対象の建築に関する文献調査や現地での実測調査などを行ないます。さらに、建築における時間と空間をそのまま記録するという方針をたて、動画撮影も行ないます。空間だけでなく時間も記録し、日本建築の可変性を捉え、柱間装置としての窓の特徴を考察しています。

3. 「掬月亭」に関する研究

以上のような歴史研究の第一弾として、今回、「掬月亭」を調査・研究しました。

掬月亭は、日本建築史上でも注目される建築物で、香川県高松市の「栗林公園^{りつりんこうえん}」内に今も残る御茶屋です。栗林公園は、元は近世初期の大名庭園だった場所で、その中の喫茶・饗宴の場が掬月亭でした。一般に公開された現在でも、御抹茶や御菓子がふるまわれ、建物内部から開放的な庭園の景色を楽しむことができます。大名庭園が最も栄えた時期とされる近世初期の庭園の建築で、庭園内の遊興の建築として巧みを凝らしています。

本研究で特に注目したのが、掬月亭の雨戸です。日本建築ならではの窓の姿です。雨戸が開放されている昼の姿と、閉ざされている夜の姿との対比が美しく、掬月亭は、日本建築における空間の時間変化を観察するにはふさわしい調査対象と言えます。

建物を囲む数十枚の雨戸は、掬月亭を管理する職員により毎日開け閉めされています。開閉の様子は非常にダイナミックですが、来園者が目にする機会は通常ありません。また、掬月亭を見学することができるのは、栗林公園が開園している昼間のみであり、夜の姿を見ることはできません。掬月亭の名前の由来は、「水を掬すれば月手に在り（現代語訳：湖面にうつった月を見て、両手で水を掬えば月が手に取れるようだ）」という中国唐時代の詩にあります。つまり、掬月亭は夜を楽しむための建築としてつくられたと考えられます。このように、通常目にするところには掬月亭の魅力が隠

されていることが、調査・研究の結果明らかになり、その多彩な美を記録し発信することになりました。

4. 研究成果の発信

研究成果物は、文献調査に基づく学術的な分析をまとめたテキストや、実測調査に基づいた図版資料と合わせて、短編映画もセットになっています。そして今回、これらの成果を世界に向けて発信することが計画されました。

掬月亭で撮影された映像は、中谷研究室の学生により編集が施され、短編映画『Transition of Kikugetsutei / 日本建築の昼と夜』が制作されました。昼と夜の美しい内外観に加え、その雨戸の開閉をダイナミックかつ軽快に映像に収めています。



職員による雨戸のダイナミックな開閉を映像に収録

映画は16分11秒の長さで、2015年9月から予告編、10月からは本編を、それぞれYKK AP窓研究所の公式ウェブサイト¹で公開しています。本誌面の写真だけではその魅力を充分にお伝えすることができませんので、ぜひ映像をご覧ください。

YKK APと中谷研究室は、引き続き柱間装置の文化誌研究を進め、日本建築の窓の魅力を発信してまいります。第二弾の研究成果発表にもご期待ください。

■本稿は、中谷研究室より提出された研究成果冊子のテキストを基に、一部加筆・修正を加えたものです。
(構成：窓研究所 柳井良文)

¹ YKK AP 窓研究所公式ウェブサイト
<http://madoken.jp>